

2011年11月2日(水)

イエスの小さい姉妹の友愛会
シスター アガタ 正田貴子さんによる講話

演題 クリスマスの意味 ―「共にいてくださる方」との出会い―

《はじめに》

シスター アガタ 正田貴さんは、聖セシリア女子短期大学の卒業生です。現在、イエスの小さい姉妹の友愛会というカトリックの修道会の会員として、アフリカのルワンダ共和国で宣教活動に従事しておられます。「ルワンダ大虐殺」の後遺症が残る人々、特に小さな子どもたちのために精力的に働いておられます。

ルワンダ共和国は、17世紀にルワンダ王国として建国されましたが、1889年にはドイツの保護領、第一次世界大戦後はベルギーの信託統治領となり、1962年にベルギーから独立を果たしました。しかし、それ以前から民族間対立が激しく、クーデターや内戦に翻弄され、1994年には当時の大統領暗殺事件をきっかけに、いわゆる「ルワンダ大虐殺」(1994年4月～6月)が発生し、その犠牲者は80～100万人とも言われています。同年7月ようやく新政権の樹立を見ました。現在では、現職のカガメ大統領が汚職対策に力を入れ、他のアフリカ諸国に比べて汚職の少なさと治安の良さが特筆される国家となっています。アフリカ大陸の、インド洋側中央部に位置し、「千の丘の国」と呼ばれる自然豊かな内陸国です。(参考:外務省ホームページ)

それでは、シスター アガタ 正田さんのお話を伺いましょう。

.....

クリスマスの意味……。皆さんお一人おひとりの想像力を使っていただいて、クリスマスの意味を深めていきたいと思えます。

皆さんにとって“クリスマス”とは、どのような日でしょうか。友だちや家族などと美味しいものを食べたり、プレゼントを交換したりして楽しく過ごす日? 確かに、私たちのほとんどがそうするのではないかと思います。でもなぜでしょう?

今から少し時間をとって、皆さんお一人おひとりの体験を書いていただきます。ただし、どなたかに見せたり発表したりするためのものではありませんし、成績にも関係ありません。ですから、正直に、できるだけ深く心に残っていること、思い出したくないようなことであっても書いてみてください。

1. あなたにとって、内面的に一番幸せと感じられたのはどのような時でしたか。その時の状況はどのようなものでしたか?
2. あなたにとって一番孤独でつらくて言葉にならないほどの気持ちを味わったのはどのような時でしたか? その時どうしましたか?
3. 「救われた」と感じた体験はありますか?

さてこれから、皆さんの想像力を使って、イエス様がお生まれになるまでの状況、その時に関わった人たちのことを聞いていただきたいと思えます。

ご存知のように、イエス・キリストの降誕から、現在の暦(西暦)が始まりました。今も大変なイスラエル、パレスチナですが、イエスがお生まれになる以前のイスラエルの人々の暮らしはさらに苦しいものでした。『聖書』に、「暗闇の中の状態」と書かれている箇所があります。人々はずっと彼、すなわちイエス・キリストが来られるのを待ち続けていました。では、イエス・キリストとはどのような方なのでしょう。 “イエス”とは「主は救う」、「キリスト」は「約束された救い主」という意味です。

皆さんにはとても信じる事ができない、ばかげたことのように思えるかもしれませんが、イエス・キリストは次のような状況の中でお生まれになりました。

イエスの母マリアは、ヨセフと婚約していましたが、同居する前にマリアが妊娠していることを知り、密かに離縁しようと考えていたのです。その時、天使から次のように告げられたと、『聖書』に記されています。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪か

ら救うからである。」このことすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名はインマヌエルと呼ばれる。」（マタイによる福音書 1 章 20～23 節）

「インマヌエル」という名前の意味はまた後でお話します。

ヨセフは今まで聞いたことのない“聖霊”という存在の介入によって妊娠した女性を妻として迎え入れたのです。“できちゃった婚”ではありません。しかも生まれて来る子は、ただ者ではない、救い主であるとまで告げられたわけです。

このことが原因で、当時のユダヤの王ヘロデは、イエスを殺そうと計画します。このことを知ったヨセフと臨月のマリアは、車も何もない時代に、約 180 キロも離れたベツレヘムという町まで逃亡の旅をしたのです。マリアは、おそらくロバぐらいには乗せてもらえたのではないかと思います、『聖書』には記述がありません。間一髪で救われたマリアでしたが、旅先で産気づきます。宿屋を探してもどこも満員で断れるばかりです。やっと、部屋は空いていないが家畜小屋でよければ使ってもよいとの申し出がありました。選択の余地はありません。マリアはそこでイエスを産みました。

私は、アフリカのルワンダという国で 7 年半ほど生活していますが、動物臭い牛や山羊の家畜小屋の状況を思い浮かべる時、そんな中で出産しなければならなかったマリアの状況は並大抵のものではなかったと思えるのです。自分がマリアの立場であったなら、文句を言わずにいられなかったと思うのです。「神様が私の身体を通じて起こしたことなのに、苦労の連続じゃないの！」と。でも、マリアは訳が分からなくても文句を言わず、ただ「心に納めて、思い巡らしていた」（ルカによる福音書 2 章 19 節）のです。

「心に納めて、思い巡らす」とはどのようなことでしょうか？知らないことをパソコンで調べて情報を得る、ということと正反対のことです。静まり返った場所で何度も何度も、よく分からないできごとを、そして言葉を、それらの意味が腑に落ちるまで、そのできごとを起こされた方、そのように言われた方に聞くことです。答えのない問いを神に問い続けることです。皆さんにとっては、どのような問いでしょうか？

先ほど、皆さんに書いていただいたことを「心に納めて、思い巡らす」時間をとりましょう。休憩ではありません。今座っている場所を変えて、ボーっと思い巡らしてみてください。窓から外を見たりしながら。

さて、次は産まれたばかりのイエス・キリストに、最初に出会った人たちのことをお話しましょう。

イエスはユダヤ人ですが、ユダヤ人には「選民意識」があります。日本人にも少しはありそうです。私もアフリカで「チャイナ」と呼ばれると、何となく嫌で「違う！日本人よ！」と言ってしまうことがあります。ユダヤ人には、救い主は自分たちのものという意識があったわけですが、最初に幼子イエスのもとへ来たのは占星術の学者たちで、東方からやって来た外国人でした。その人たちは学者ではあっても、何か訳の分からない星占いをする怪しげな人たちという風評まで立てられていたとも言われています。

次は羊飼いたちです。夜通し羊の番をしていた彼らは、当時の社会の中で最も身分が低く、いわゆる 3K（汚い、きつい、くさい）労働をしていた人たちでした。その彼らにお告げがあったのです。

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。」

「あなたがたは、布にくるまって飼料桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。」

（ルカによる福音書 2 章 11・12 節）

この言葉をすぐに信じて、彼らは出かけて行ったのです。そして、出会ったのです。羊飼�たちの仕事も 3K 労働の状況も何も変わらなかったことでしょうか。しかし、「救い主が自分たちのためにお生まれになった！それを神様がこの自分たちに告げてくださった！そして出会った！」という大きな喜びを心に思い巡らし、以前のような苦しいだけの生活ではなくなった状況（内面から変えられた生活）に入ったということを想像できますか？

さて、大人になられたイエスが「救い」を待ち望んでいる人たちと共に歩まれた人生についてお話したいと思います。たくさんありますので、その一部です。もっと知りたいと思われたら『聖書』をお読みになってください。

徴税人をしていたザアカイという人の話です。集めた税金をごまかしていた人間が、イエスの評判を聞いて「会ってみたい」と思ったのです。背が低かった彼は群集に阻まれてイエスを見ることができません。ザアカイは木に登ってイエスを待ちました。イエスは見上げて彼を見つめ、そして声をかけました。

「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」
(ルカによる福音書 19 章 5 節)

人々から忌み嫌われていたザアカイです。その彼の心の底に広がる暗闇をご覧になって、イエスは声をかけられたのです。ザアカイが変わったからではありません。彼の苦しみ、孤独、罪悪感を救うためでした。

「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」
(ルカによる福音書 19 章 10 節)

しかし、それだけのやり方では救いきれない人が多過ぎました。私たち自身です！

皆さんが最初に書いたことを、もう一度見てください。私にも、自分が救われたと実感した体験がありますので、そのことをお話ししましょう。

幼児教育を学び、障がい児の施設に実習に行き、また、養護施設でも実習をした後、肢体不自由児養護施設に就職しました。我ながらがんばっていい仕事をしていると思っていました。ある時、休暇を利用して同僚とリゾート地に旅行しました。ホテルへ向かうまでに通過した町には、たくさんの物乞いをする子どもたちや、物を売ったりしている幼い子どもを目にしました。障がいを持った人もいました。私たちは何もできず、自分たちの居心地のよい空間で食べたいものだけ食べ、好きなように過ごしました。旅行から戻った後、何かが引っかかりました。「私はキリスト者として、何か違う！」と。「偽善者だ！」と。旅行はストレス解消どころか、心に何か重いものを残す結果になったのです。生き方を、イエス・キリストから問われる日々が始まったのです。

自分の力ではどうにもならない弱さ、いい加減さ、エゴ……。それらを全て承知で、だからこそ救いたいというイエスの誕生と労苦（十字架）、死……。そして「復活」を引き受けられたイエスとの衝撃的な出会いがありました。

これは、頭で考えて分かることではないのです。人間というものは、毎日繰り返される自分の弱さを徹底的に見つめた時に、「自分の力では変えられない。何もできない」としみじみ感じなければ、別の言い方をすれば「どん底の底突き感」を味わわない限り、本気で「救われたい」と願わない存在なのではないでしょうか。

クリスマスは、そんな思いを持っている人たちにとって最高の喜びの日なのです。

最初に、「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」と『聖書』に書いてあるというお話をいたしました。「インマヌエル」とは、「神は共におられる」という意味です。

神様があなたのそばにいつも共にいる、ということを感じてみましょうか？暗闇を持った私たちを救うために来られ、しかもただならぬ状況の中を生き抜かれ、愛し尽くされ、いつも共にいてくださる。それが「インマヌエル」と呼ばれるイエス・キリストがもたらしてくださった“クリスマス”なのです。

アフリカのルワンダで生活を始めた頃、クリスマスソングも流れず、綺麗なイルミネーションもなく、何も変わらないいつもの土埃の中で迎えるクリスマスが何となく物足りず、寂しい思いをしたのですが、ある年、日本でクリスマスシーズンを過ごして感じ方が変わりました。

キリスト教徒でもないのにきらびやかにデコレーションした実家、街中、何となく浮かれていても寂しい目をした人々。獣臭に満ちた家畜小屋でお生まれになったイエス・キリスト、そこに集まった人々の情景を心に思い巡らす時間を持たない人々……。そんな日本に比べて、ルワンダのクリスマスはずっと、ずっとクリスマスらしい！ つい私はそのように感じてしまいました。

今年のクリスマスが、皆様お一人おひとりにとって「共にいてくださる方」との出会いに恵まれるものとなりますように！